

## マズロー＝ウィルソン欲求理論が含意するもの（Ⅱ）

肥田 日出生

### 要旨

マズロー＝ウィルソンの欲求段階論は、二つの基本命題を含んでいる。

1. 優先的に充足を求められる欲求は、5段階をなしている。
2. 充足されると最優先欲求は最優先のもでなくなる。

— がそれである。

2については、限界効用逓減の法則などを援用することでもって割合容易に、その理由を推察できる。しかし、筆者の探求する問題は、直接には1に関わっている。そして、マズローはその順序を現象学的に提示しているのみで、理由についてはほとんど論じていない。

充足の優先順位を決める基準は、最終的には個人が持つ、その「充足容易さに関する知識」だと思われる。それでもって検討すると、マズローの欲求段階順序は明確に説明されていく。

だが、最後の自己実現欲求については状況は異ってくる。その前段階の尊敬欲求との比較でもって、相対的に優先順位が後になる、というだけでは考察の目的は達成されない。その充足が至高体験を与えるものである以上、充足は他のいかなる欲求よりも困難であることが論証されねばならない。この問題は新しい性格のものであり、考察は次稿でなされる。

### 目次

はじめに

1. 緊急欲求の交替現象を示唆する図式
  - 1-1. 心理要素を認識する主要手段は追体験
  - 1-2. 優先的に充足される欲求はなぜ交替するか
  - 1-3. 三角形図式を球体図式にする
2. 欲求段階は何かから生じるか
  - 2-1. 自己の欲求を認知する三つの方法
  - 2-2. 欲求緊急性の近似的変数は「自覚された」苦痛の大きさ
  - 2-3. 苦痛を潜在化させる機構
3. 苦痛解消難易度の知識と五段階欲求
  - 3-1. 身体的欲求と精神的欲求の充足難易度

註 この論文もまた話し言葉で書かれる。我々が最も理解しやすい言葉は、日々会話で用いているものである。それが日々の活きた感覚に最も沿っているからである。近代日本でもコミュニケーション効率の増大を求めて、書き言葉話し言葉に近づける運動がなされてきた。その結果、文語文は「である」調に変わってきた。

けれども「である」調の文体は、まだ我々の話し言葉と一致したものではない。いわゆる言文一致の運動は「です、ます」調でもってのはじめて完成すると思われる。

もちろん、文章に求められるのはコミュニケーション効率の良さだけではない。美しさ、品格などが一定水準以下でないことも必要にされるだろう。意味伝達の効率はよくても、どぎつきなどがあって不快感を与えるような場合は、その文体は避けられるであろう。

けれども、日本語の話し言葉が「である」調よりも大きく下品であるとは、筆者には感じられない。むしろ、まるやかで心地よい場合も少なくないと思う。そうしたこともあって、本稿もまた筆者は話し言葉で書き、今後も出来る限りそう努めていくつもりである。

- 3-2. 生理欲求と安全欲求の充足難易度
- 3-3. 愛情欲求と尊敬欲求の充足難易度
- 3-4. 愛情関係より尊敬関係の方が構築が容易というケースについて

#### 4. 残された問題

参考文献

## はじめに

前稿（I）では、マズローの欲求五段階説に、ウィルソンが新しい境地を追加した様を示しました。彼は至高体験という心理事象に関して重点的な検討を加えることによってそれをなしたのです。

マズローは、至高体験とは自己実現努力が実を結んだときに得られる副産物だとしていました。またそれ故に、出現した喜びに驚かされることになるのだ、と判断していた。

対してウィルソンは、喜びの原因は新しく出現する意味の奔流にあるとしました。そして、人は意志とイメージ力でもって、これを意図的に選び、つくことも出来るのだと考えました。その出発点が認知対象への意識の集中にあることになるのですけれども、とにかくそれによる至高体験もあるのだ、と彼は結論しました。

マズローはそれを認めました。ところがウィルソンの明かした構造は、マズローのいうタイプの至高体験をも説明範囲に含めていました。それは、第五番目の欲求段階を、自己実現欲求から意味発見欲求と言い換えてもいいほどの内容を、実質的には含めていました。

ウィルソンはそれを明言しませんでした。実際そうでした。そこで、マズローの欲求理論はウィルソンによって少なくともそのように修正されたこととなります。マズロー理論は今日現時点では、すでにマズロー＝ウィルソン理論になっているわけです。

だが、それで一件落着という感覚を筆者は得られませんでした。ウィルソンの言う、リアルにして新しい意味に充ちたイメージ世界を見出すという「認知」作業は、至高の喜びを味わうという「感情的な動き」をどうして触発するのでしょうか？

本稿では、ウィルソンが到達した地点のさらに奥にある心理ゾーンに足を踏み入れてみようと思います。そのためにはまず、マズローの五段階説の背景にある論理をいまいし総合的に推察せねばなりません。

## 1. 緊急欲求の交替現象を示唆する図式

### 1-1. 心理要素を認識する主要手法は追体験

心理学の教科書的な本には通常、欲求の定義がなされています。用いられる言葉には本によってばらつきがありますが、それは「一定の行動を志向させる意識」であるという点では共通しています。「緊張を伴う」という意味が意識の語に付加されている場合もありますが、それはそうでしょう。行動を志向させているのですから、その分緊張があるはずなわけです。

そこでまず、人の欲求に関する認識とは、どういうものなのかを確認しておきましょう。欲求は心理的なものです。そして、人間の心理事象の認識とは、マックス・ウェーバーの言うところの追体験的なものに、高度になるはずで<sup>(1)</sup>。

(1) M. ウェーバー著、清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波書店、1972年、参照。

なぜなら我々は他者の心理を、直接五感で認識することが出来ないからです。そこで我々は他者の言動を観察した上で、それを意識しながら、自己の内に蓄積された内的な体験を内省するという方向に進みます。そして、他者と共通していると感じられるような、自己の内にある心理動向を感知します。そうやって他者の言動の心理状況を追体験するのです。

その際我々は、人間の意識には共通したものであるということを、暗黙の前提としています。それを前提に、ウェーバーの言うところの追体験に相当する作業をして他者の心理を認知するわけです。欲求に関しても、ことは同じであります。

### 1-2. 優先的に解消される欲求はなぜ交替するか

上記を踏まえて、考察を進めましょう。マズロー＝ウィルソンの欲求段階論は、二つの基本命題を含んでいます。

1. 優先的に充足を求められる欲求は、5段階をなしている。
2. 充足されると最優先欲求は最優先のもでなくなる。

この現象を成り立たせている原因を考察することから探求を開始します。

筆者が探求しようとしている課題は、直接的には1に関わっています。自己実現の欲求は、なぜ最後に充足を最優先とされる欲求となるのか。そして、それが充足されると、なぜ至高の喜びが誘発されるのか。こうしたことは、すぐれて1につながる問題なのです。

だが、それは間接的には2も関わっています。そして、命題に示された事象の原因を把握するには、こちらの方が比較的容易に見えます。

そこで、まず2の方を先に処理してしましましょう。そうして本丸たる1の探求は、荷を軽くした上で行うのがいいと思われれます。

最優先で充足が求められた欲求が、充足されるとそうでなくなるのはなぜか？ 最大の理由は、欲求は充足されるとそのドライブが逓減していくから、という点にあるように思われれます。

ミクロ経済学での「限界効用逓減の法則」は、それを支持しているように見えます。この法則は「欲求が充足されたときの効用（快、喜び）の大きさは、充足されるにつれて逓減する」ということを示しています。

けれども、充足されたときの快の大きさは、充足したいという欲求の強さと表裏の関係にあるとみていいでしょう。それはまた、充足できていない状態での苦痛（不快）の大きさとも正の比例関係にあるとみられますが、これに関しては後に再論いたします。

ともあれそんなわけで、優先度の最も高い欲求が、充足されるとその地位から退いていくという現象は、その納得される理由が割合容易に見出されるように思われれます。我々の内的体験はまた、それを支持しています。

### 1-3. 三角形図式を球体図式にする

またこの機会に、一つの誤解形成誘因を取り除いておきましょう。それは、これがマズローの欲求階層理論だ、と言わんばかりに示されてきた、例の三角形図式です。そこでは生理的欲求から自己実現欲求までを、底辺から上部に向けて並べている。本稿(Ⅰ)で示したのはそうした表現方法の一例でもありました。

けれども、この図式表現には、マズロー＝ウィルソンの理論を、必ずしも的確に反映していない面が大きいのです。三角形図式は、底辺近くに描

かれた欲求層ほど低次なものであって、上に行く程高次元であるという面の印象のみを強く与えがちです。

しかし、マズロー＝ウィルソン理論では、充足を最優先とされる欲求の順序に関しては、明確な説明はほとんど与えていないのです。

確かに、マズローは五つの欲求に関して次元の高低を言っています。彼はそれを、観察事項として言おうとしているのですが、無理があるのです。欲求の低次、高次を言うのは、認識方法論的には価値判断を含むものとなります。だから、それは客観的論述とは言い難いのです。

だが、彼は敢えてそれを、次のような主旨でもって言っています。すなわちこれについては「有機体自体が価値のヒエラルキーを命じている」のであって、「科学的観察者が……(中略)……それを報告しているにすぎない」ものだ、と<sup>(2)</sup>。

つまり——自分の価値判断で言っているのではない。人間欲求の次元については人々に共通するものがあるのであって、自分はそれを観察し、事実知識として言っているのだ——というわけです。

しかしこれには無理がある。彼の論旨を正確に生かすというならば、それは「人々が高次とみる」欲求とすべきでしょう。だが、マズローは敢えてそういう断りを入れません。代わりに、「心理学から価値の問題を取り除くことは、心理学を弱体化するばかりでなく、その十分な成長を妨げ」る、と言って押し切っています<sup>(2)</sup>。

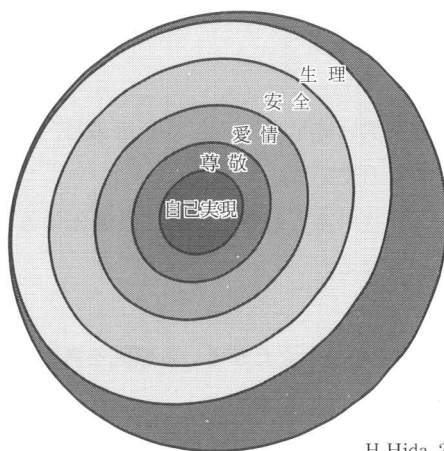
彼は、詳細なところにはあまり神経を使わないのです。自ら認めているように、結論的・本質的なところのみを太い線で描いていくタイプの学者なのであります。

ともあれそういうわけで、マズローは充足を最優先とされる欲求の順序については、低次、高次というイメージを付与しているだけなのです。実質的なことはほとんどなにもいいません<sup>(3)</sup>。ウィルソンも同じです。そして、その理由を探るのは難しい仕事なのです。

その反面、充足最優先の欲求が、一定の充足をうると最優先の位置から引き下がっていく理由は、今述べたように割合に自明です。されば図には、そちらの側面を明示すべきでしょう。

そのあたりの要求を満たしうるように図式化する方法はどんなものか？ それには、むしろ硬式野球ボールのようなものをイメージするほうがいいのではないかと、筆者は考えます(図1)。図はそれを一断面と共に示しています。この球体に

図1 球体で示したマズロー欲求段階



H. Hida, 2002

(2) A. H. マズロー著、小口忠彦訳「[改訂新版] 人間性の心理学」産業能率大学出版部、1987年、145-146頁。

(3) 前述のように、マズローの考察、論述の方法は現象学的である。その方法でもって、高次の欲求と低次の欲求を比較してみられる諸傾向を、彼は実に、16もの項目として箇条書きしている。

こういう文章から本質的な構造を抽出することは、期待しがたいことである。従って、彼の五段階説の理解を志向するものは、解説者が図を描くと、それに頼って理解しようとしがちになる傾向が高い。このように、彼を理解しようとする人にとって図の果たす役割は通常より大きくなるのだ。その意味で図が直感的に示唆するところは軽視できないのである。

において、生理欲求から自己実現欲求までの階層を、(ボールの)外側から芯に向かって、順に位置づけていくのです。

なお、論旨を簡明に表現するために、第三層の「所属と愛の欲求」を「愛情欲求」でもって代表させます。第四層の「承認と尊敬の欲求」も「尊敬欲求」で代表させます。以下、本稿はそれで通じます。

さてここにおいて欲求は、第一に外層から内層へと、1, 2, 3, 4, 5層と、層をなしていると考ええます。

第二に、各層は当初、各々特有の色彩を帯びているとイメージします。

第三に、(マズローの結論をそのまま移行させて)人は通常、まず外層の生理的欲求から順に自覚していくと考えます。肉眼で球体を外側から見ている状態をイメージするのはその理解に役立ちます。

第四に、各々の欲求層は、一定の充足がなされると、透明化していくとイメージします。

第五に、すると人の肉眼は透明な層を透視して、その次の内側の欲求層を視覚することになります。人の意識は有色のものを認知・自覚すると考えるわけです。

そうすると、第一層の欲求はある程度満たされると、透明化することになります。すると次の、第二層の存在が色づいていることが自覚されることになる。

そこで、人は次にこの層の欲求を満たそうといたします。そしてこの第二層の欲求もある程度満たされると、第一層と同様に透明化します。すると第三層の存在が意識されるようになる……以下、同様に進みます。

この図はマズロー理論の本質的なところを、三角形図式よりも遙かに的確、かつ、豊富に含めて

いるように思われます。図としては若干込み入ってきますけれども、この程度ならば複雑すぎることはないでしょう。

## 2. 欲求段階は何から生じるか

### 2-1. 人が自己の欲求を認知する三つの方法

さて、本丸に接近いたします。図1が示唆するように、最優先の充足課題となる欲求には順番がある、とマズローは考えています。これがいわゆる欲求の段階でした。問題は、こうした順序はどうして生じるのか、です。

それについてマズローは、緊急性の大きさといった程度の言及しかしていません。しかし、こうした緊急性の差はどうして生じるのでしょうか。そもそも、欲求の緊急性とは何でしょうか。

ここでまず、留意しておくべきことがあります。緊急性とは、「当人が感じるもの」というのがそれです。緊急だと感じる課題は、その欲求の充足です。

ではそもそも自分の欲求というものを、人はどのようにして認知し自覚するか。考えられうる方法は次の三つではないでしょうか。

第一は、欲求そのものを、直接感知し自覚するという方法です。第二は、それが充足されたときの満足感でもって、推測し認知するという方法です。第三は、欲求の不充足によると思われる苦痛を感じて、それを通して欲求を推測自覚するという方法です。

我々が、自分の内にはこれこれの欲求がある、という場合、多くはこの三つの方法の全てを用いて欲求を感知しているでしょう。言うなれば、三面から認知している。だが、これらの方法には、感知手段として汎用性の差があるように思われます。

それを考えておきます。なぜかという、汎用

性の大きいものを人は「優先的」でかつ「主たる」感知手段として用いると思われるからです。

では、その汎用性とはいうと、それは今挙げた順番に高くなっているように思われます。

第一の、欲求そのものを直接自覚する方法では、認知できる欲求の範囲は比較的狭いように見えます。我々は、欲求そのものがかなり強い場合には、それを衝動として感じることもあるでしょう。けれども、弱いものの衝動は感知しがたいのです。

それに比べると、ある行為によって得られる満足から、欲求を推察自覚するという方法は、第一の方法よりカバーする領域は大きいと思われます。喜びが大きいことから、この行為によって充足を求める欲求はこのように大きいものだったのだ、と認知するわけです。

しかし、不充足によって感じられる苦痛は、それを超えたカバー範囲を持っています。欲求には、充足され得ないままで放置されるものも少なからず存在するはずです。それに関して、充足されたときの満足感という手がかりは、適用できないのです。

以上の考察を踏まえて、あらためて全体をオーバービューしましょう。衝動としてそれ自体が自覚される欲求は、その不充足による苦痛を手がかりとしても感知されうでしょう。充足された満足感から認知される欲求についても、同様なことが言えます。それに至る前の段階で、たとえ短い時間であっても、人は不充足の苦痛を体験します。だから、これも苦痛という指標でもってカバーされるのです。

従って、欲求の全体を認知するための普遍的な指標をもし一つ選ぶとすれば、それは不充足の苦痛ということになるでしょう。論理的にそれが妥当ということになります。そして、人は、欲求を認知する際には、そういう汎用性の高い指標を、

通常優先的に用いていくと思われます。

そうした行為を続けていると人は、自然にそれを主たる指標として用いるようになっていくでしょう。そういう意味での「主たる」手段に、不充足による苦痛は、なるわけです。

もちろん、そうした中で、時には、強い欲求に関しては、衝動として直接感知して認識することもあるでしょう。充足した喜びでもって、欲求の大きさを自覚することもあるでしょう。三つの方法は、本来、適宜に組み合わせられ用いられるものでありますから、それは当然でしょう。

しかし、通常は、まず、不充足の苦痛感覚が欲求を認知する指標として自覚されるというのが、筆者の判断です。そうすると、マズローの言う緊急性の意味が、ある程度明確化してきます。すなわち、不充足による苦痛が大きい欲求が緊急性が高い欲求と言うことになるわけです。これは、我々の内的経験に照応させても納得できるように思われます。

## 2-2. 欲求緊急性の近似変数は「自覚された」苦痛の大きさ

以上のように考えてくると、「不充足状態での苦痛の大きさ」が、マズローの言う充足の優先順位を一義的に説明してくれるのではないか——という期待が湧いてきます。五段階理論の順序はそれですっきり理解が出来そうだ、と。だが、事態はそう一筋縄ではいかないようです。

ここで、苦痛というのは一つの信号と考えることが出来ます。信号は受信されます。そして我々に欲求充足の緊急性を感じさせるのは、最終的にはその受信され「自覚された苦痛」の大きさであるはずです。

もちろん苦痛の物理的な信号の大きさがそのまま、受信され自覚された苦痛の大きさに直結しているのならば、そんなことを考える必要はありま

せん。だが我々の心理ではむしろ、受信のあり方が、認知されたる苦痛に予想外に多大な影響を与えているようにみえます。

フロイトの深層心理学は、そのことを示唆しています。彼の思想における、顕在意識、潜在意識はそれを把握するのに助けになります<sup>(4)</sup>。

すなわち自らの理論枠を用いて彼が取り上げている精神事象の事例を見ると、苦痛が解消されにくいと認知されたら、その苦痛は顕在意識にとどめおかないようにすることが起きるといえます。そうした場合には、人は潜在意識領域に苦痛を沈下させます。それによって、その苦痛は自覚されにくくなります。こうして結果的に、自覚されたる苦痛を和らげるのです。

人の意識は、そういう防御機構を備えているようです。それによる、記憶喪失もあり得ます。極度に残酷なものを認知したときなどに起きる失神は、その短期的で端的なケースと位置づけることも出来ます。

それ故、苦痛の信号を我々の意識が割引して自覚したら、緊急性はその分小さくなります。逆に、過大に自覚すれば、その分大きくなることになるでしょう。だが、本稿が問題としている苦痛では、代表的に取り上げられるべきは前者であると思われれます。

### 2-3. 苦痛を潜在化させる機構

さて、上記の考察の中には、苦痛を潜在意識のもとに追いやらせる要因が暗示されています。それは「苦痛を解消する容易さの知識」です。

我々は、不充足欲求を充足させようとする試みを、何度も行いながら人生を生きています。その

中には、無事充足させられ、不充足の苦痛が解消された欲求もあるでしょう。同時に、充足が成就されなかった欲求もあるでしょう。それらの体験を繰り返し、年齢を重ねるにつれて、人は、各々の苦痛について、その解消の容易さを知ると考えられます。経験的に、確信を持って知るわけです。

その結果、解消の容易なタイプの苦痛は、それが感知されるやいなや解消されうることを人は知ります。だから、敢えて潜在意識領域に押し込める必要がない。人はそれを顕在意識にとどめおきましょう。他方、困難なものは、潜在意識領域に追いやられ、沈下させられやすいでしょう。

この力は、受信という最終段階で働くが故にかなり決定的に見えます。このことを認めると、マズローの言う「緊急性」とはすなわち「自覚された苦痛」に近いものになると容認できるでしょう。そして、その最も妥当な代用変数をひとつあげるならば、それは「その解消の容易さの知識(イメージといってもいい)」となるでしょう。

従来欲求の緊急性という、欲求そのものの強さが、あたかも自明な等価要素のごとくに想起されてきました。けれども、欲求それ自体の「信号としての強さ」は、いまみたように緊急性には直結していないのです。加えて、それらの信号自体には、感知しがたいものが多く含まれています。さらに加えて、その感知のされ方は、充足された度合によって、大きく左右されます。

だから分析上、有用な指標となり得ないのです。そういう指標でもって問題を追うと、探求は攪乱されるでしょう。むしろ、信号の強さも関与した結果としての、より総合的で最終的な指標に注目した方が実りは多いでしょう。そしてそれが、その当人の持っている「苦痛解消の容易さ(あるいは難易度)の知識」だったのです。

いま、その基準の有効性を、暫定的に実地検分

(4) 邦訳書では意識、無意識という直訳語が用いられていることが多い。だが、これはあまりいい訳ではない。

いたしましょう。

どのようにして検分するか。それを見出すには、マズローの理論をより詳細に解析することが必要に思われます。

マズローの欲求段階理論には、よく見るといくつかの定常状態が想定されていることがわかってきます。

いま、彼の言う下位から上位へといたる欲求に、番号を付けてみましょう。1が生理的欲求、2が安全欲求、3が愛情欲求、4が尊敬欲求、5が自己実現欲求というようにです。

すると彼の理論には、まず最初に、全ての欲求が充足されていない状況での定常状態が想定されていることがわかります。その時の欲求の充足優先順序は

1 → 2 → 3 → 4 → 5

となっているでしょう。これがいうなれば初期状態です。マズロー理論を現すものとして通常提示されてきた三角形図式は、この初期状態を示したものでした。

しかし、1の生理的欲求が充足されると、新たな、定常状態が生じます。その時の欲求の緊急順序は

2 → 3 → 4 → 5

となっているでしょう。1は充足されてしまっているのに、5のさらに右の方に移動してしまっているでしょう。ここでは、充足された欲求については書かないことにします。

以下、2、3、4の欲求が充足されて行くにつれて、定常状態は

3 → 4 → 5

4 → 5

5

へと、変わっていくでしょう。マズローの欲求段階説は、詳細にいうと、こういう定常状態の移

行を言っているわけです。

マズローの欲求段階順序を検討するということは、実は、こうした定常状態の移行を検討することに置き換えることが出来ます。

すると、第一段階から第二段階に移行するには、1の生理的欲求が優先的に充足されさえすればいいことになるでしょう。そして、その充足が最優先になることを言うためには、2の安全欲求より優先的になることを論証すればいいでしょう。

ここで1を同時に、3、4、5と比較したいという思いに駆られます。しかし、それに立ち入ると思考は複雑になりすぎます。

そこで代わりに、次の定常状態において、最左のものとその右のものとを比較するというのを、順次続けていくという方法をとるのが賢明です。もし各定常状態において、最左のものよりその右側のものの方が、優先順位が低いと論証されていくなれば、上記の思いは結果的にほぼ成し遂げられたとみていいでしょう。

### 3. 苦痛解消難易度の知識と五段階欲求

前節で見出した方法をもちいて、マズローの欲求段階順序の理解を試みましょう。

#### 3-1. 身体的欲求と精神的欲求の充足難易度

マズローは、生理的欲求と安全欲求を、身体的であって低次の欲求と捉えています。対して、愛情欲求、尊敬欲求、自己実現欲求を精神的で高次の欲求と捉えています。

低次、高次という把握はここでは考慮に入れなくておきましょう。それでも彼が、身体的欲求グループがまず、優先的に充足を志向されるものという判断をしていることには変わりありません。精神的な欲求グループは、その後充足がはから



れるとしているのです。

これは、充足の難易度、不充足による苦痛解消の容易さの知識、と比例的に対応していないでしょうか。明らかにしているでしょう。身体的欲求の充足は、精神的欲求の充足より容易です。そういうことを人は知っているのです。

もちろん、発見は出来ても、それを実施するのはむずかしいというケースもあります。だが、まず妥当な方法が正確に発見できなかったら、人は途方に暮れるのです。実施の方法を考案する前でも序列はほぼ決まってしまうのです。

精神的欲求を満たす方法は、それが精神という見えないものに関するものであるだけに、的確に見出すことがむずかしい。それに比べれば、食欲を充足する方法を見出すのは容易です。食べ物という物質を食べればいいのですから。

### 3-2. 生理欲求と安全欲求の充足難易度

同じように、各々のグループの中での苦痛解消難易度を検討してみましょう。まず、身体的欲求グループについて。生理的欲求と安全欲求とは、どちらがその充足手段を見出すのが容易かはわかるでしょう。

いうまでもなく、食欲、睡眠欲、性欲などの方が容易です。ものを食べたり、眠ったり、異性との身体的接触をしたりするのは、具体的で分かり易い方法です。

安全をうるというのは、それに比べたら方法の発見はむずかしいでしょう。明日もあさっても持続的安定的に食べられるようにする方法は、今日の空腹を充たす方法よりも、見出したり考案することが困難です。手段が単純でなくなってくるからです。

外敵から身体や財産への被害を受けないような状態を持続することも同じです。自分の側の戦闘

能力を維持したり、外敵との外交交渉をおこなって相互不可侵の約束を取り付け守らせることなどは、複雑な作業を含んでいます。

そういう知識を人はもっているのです。従って、生理的欲求と、安全を得たいという欲求とが、もしそのドライブの強さにおいて同等程度であったとしても、人は生理的欲求の充足を優先的に試みることになるでしょう。

「手近主義」という言葉が、かつて筆者の青年時代に友人知人の間で用いられたことを記憶しております。女性との交際を楽しむ際に、理想の女性の探求に乗り出すよりも、手近な女性でもってそれをなす傾向の強い友人を評して言うておりました。「彼は手近主義だからなあ……」といったごとくです。

しかし、そういう評をする人自体の心理にも、そうした性向は内在しているのです。理想を求めたいという意識も、手近で楽に間に合わせたいという意識も、共に人間の心理の内には内在しています。

そして、その欲求を充足するために持てるエネルギーの大半を集中しようという意志がない限り、いかえれば、充足対象がその時点での当人の中心的な課題のものでない限り、手近で間に合わせたいという姿勢の方が優越していくのが一般的なのです。方法の発見が容易な欲求についての充足を優先さすというのは、それに共通するところを持つ心理現象であるように思われます。

### 3-3. 愛情欲求と尊敬欲求の充足難易度

では、マズローが精神的と称する欲求グループについてはどうでしょうか？ まず、愛と尊敬とはどうか。

愛情欲求とは、他者と主として横の関係で、心の交流をしたいという欲求と見ていいでしょう。

対して、尊敬欲求では、他者と自分を縦の関係に置きます。そして、尊敬されたいという欲求では、自分を上位において、他者に下位から仰ぎ見るように交流して欲しいという意識になるでしょう。

縦の関係においては、自分を下位に置いて他者を尊敬するというケースも考えられます。そういう欲求も、現実にはあります。それによって快感をうる心理も我々の内にはあるように思われます。

けれどもそれは、尊敬されたい欲求の裏返しの代償行為とみるべきでしょう。サディズム心理とマゾヒズム心理とが表裏の関係にあるが如きです。そしてマズローの言う尊敬欲求では、尊敬を表明するのではなく、受ける欲求に主眼がおかれています。

では、上記の意味での愛情欲求と尊敬欲求とは、どちらが充足するのが容易でしょうか？ もちろん、両者とも充足されていない状況において、です。一般的には前者の愛情欲求ではないでしょうか。他者と横の関係で交流するのは、縦の関係で仰ぎ見て交流してもらうようにもっていくのより、明らかに容易です。そして、そのことを人は知っているのです。

### 3-4. 愛情関係より尊敬関係の方が構築が容易 というケースについて

もちろん、例外的な外観を呈するケースも存在します。横の愛情関係を結ぶのはほとんど全く不得意だけれども、尊敬される関係になるのは比較的容易だとみえる人物は、ままあるものです。

しかし、よく見るとその場合の尊敬関係は、相手と一定の距離を保つての関係であるのが通常です。それ以上近づけると、その関係が壊れるからです。つまり、どういうことかという、彼はその場合、自分の実像とは離れたイメージ、虚像的なイメージを相手に抱かせることによって、かろ

うじてその関係を成立させているわけです。

一定以上に近づくと、実像が感知されてしまう。すると、相手が抱いてきた従来のイメージは崩壊します。そうすれば、相手の尊敬の意識は消滅し、尊敬される関係もまた無くなってしまいます。

世の中には、言動の大半がイメージ効果を計算してのものであるという、そういう人物は少なからずいるものです。通常、そういう言動には「政治的」という評が与えられます。そういう人間はまた、政治的人間とも言われることが多い。

そういう人物は、他者と精神的に近接した交流を好みません。愛情関係というのは、近接しての交流を多く含むものです。彼が愛情関係を不得意とするのは、それ故にすぎません。尊敬関係ならば、一定の距離を置いての場合も成立しうる。そこで、尊敬される関係を持つほうが彼には容易だ、ということになるわけです。

しかし、マズローはそういう形での尊敬関係は考慮に入れていないように見えます。彼が尊敬欲求を論じる場合、実像によるそれだけを想定しています。実像から離れた虚像的なイメージを操作して得られる尊敬は、彼の言う尊敬に入らないのです。

彼は、理論の骨格だけを太い線で描くように示していくタイプの学者です。そういう尊敬関係には、思いもかけていないのかも知れません。あるいはそれは、尊敬を受けているとははなから見ていないのかも知れません。

実際、そういう尊敬を受けても、マズローの言うところの尊敬欲求は実質的には充足されないことになるでしょう。受けている当人も、充たされないままで、あくなくそれを求め続けるケースが多いのではないのでしょうか。

社会主義諸国の国家元首が国民から受けている尊敬は、マズローの言う尊敬にはほとんどの場合

入っていないということです。

愛情欲求についても同じです。もし、政治的イメージ操作によって、横の交流が形成し得たとしても、それは精神的な交流とはマズローは認めないでしょう。愛情も尊敬も、相手に対して心を許している、実質的なものだけを、彼は想定しているわけです。

尊敬からそういうケースを取り除くと、マズローの言うところの尊敬欲求を充足するのは、愛情欲求を充足するよりも、困難であると判断しても、問題はないように思われます。人が尊敬欲求の充足より優先的に愛情欲求充足に向かうのは、つまるところはそういう知識を持つが故であるというのが、筆者の意味理解です。

#### 4. 残された問題

以上の考察では、苦痛解消難易度の知識という指標は、マズローの示した優先的欲求順序をきれいに説明してくれました。この勢いで、尊敬されたい欲求と自己実現欲求との充足難易度を比較すれば、探求は終着点にたどり着くような気もしてきます。

しかし、最終段階はそうはいかないようです。この段階になると我々の目前には、新しい課題が浮上してくるのです。

マズローは、自己実現欲求が充足されると、至高体験が得られるとしました。至高体験とは、至高の喜びです。そして、最高の喜びが得られるのは、最高に充足されたい欲求が充足されたから、と推定できるでしょう。

だから、五番目の欲求については、ただその充足の困難さが尊敬欲求に「比べて」大きいと証明するだけでは、探求はゴールにならないわけです。尊敬欲求をもふくむあらゆる欲求を超えて、遙か

に充足が困難であるということを、論証しなければなりません。その充足困難さは他を圧しているという認識が人間にはある——と言わねばならない。

本稿でのこれまでの考察を生かしてすすむと、そういう分析の方向が浮かんでくるわけです。そして、はたしてそうかどうかを確かめるのは、新しい種類のテーマです。少なくとも、マズローの言う自己実現という欲求把握のままでは、探求はむずかしいでしょう。

彼の言う自己実現とは、自己に関する理想のイメージを実現することでした。そのイメージは、当人が理想と思っているのであれば、なんでもいとされていきました。だったらそれは、「買い物上手の奥さん」だっていいでしょう。「妻の家事によく協力する夫」であってもいいわけです。

では、そういうイメージを実現することは、他の全ての欲求を充足することに比べて、圧倒的に困難と言えるでしょうか。どうもそうには思えません。場合によってはそれは、他者から尊敬を受ける状態を実現するよりも易しいのではないのでしょうか。

このように考えると、第五番目の最終段階を「自己に関する理想イメージを実現したいという欲求」というレベルで捉えていては、ダメなことがわかってきます。

それを示唆してくれたところにウィルソンの貢献がありました。彼は、至高体験をもたらす原因を、もう少し結果(至高体験)に近いところに求めました。それは事物に関する新しい意味が、リアルに、かつ、あふれるごとくに感じられる状態でありました。

前稿(Ⅰ)でのべましたように、彼はそれを、マズローとは別の至高体験をうるルートだと表明し、そしてその内容を見出していきました。です

けれども、実際には、マズローの言う至高体験の、より結果に近い原因をも明かしたことになっています。

それからみると、マズローの自己実現というのは、事物に関する新しくリアルな意味を意識の中にうるための契機にすぎないものでした。ウィルソンの考察は実のところでは、そのことも明かしているのです。

またウィルソンによれば、そうした意識状態は、それ自体を目標にして、意図的にうることも出来るものでした。意図的に実現できるということは、つまり、それを目標として欲求できることをも意味します。だから、これをたとえば意味賞味欲求ということさえ出来るのです。

事物に関する新しい意味をリアルに感じるというのは、自己実現よりも普遍的な、欲求段階の名称だったといえるのです。もちろん、ウィルソンは、自己実現という言葉をも、それに置き換えたかどうかというような、そこまでの提案はしていません。

彼はマズローが心理学に開いた境地を、ほとんど驚嘆を交えるほどに評価し尊敬していました。不用意な論評が、師の業績を過小評価させるような印象を与えることを、むしろ恐れていたふしがかがわれる——前稿（Ⅰ）にも示しましたように、それが筆者の推察です。だが、我々の探求は、ウィルソンの明かしたところに焦点を当てなければなりません。

そこで問題は、事物にリアルな意味を新しく感じたいという欲求が、充足するのに至高の困難さを伴うものなのか、ということになります。これは、本稿でしてきた考察からすると、ほとんど新しい局面の課題になるのです。稿をあらためて行うことにいたします。

参考文献

- 日本マーケティング協会編『マーケティング・ベジックス〈第二版〉』同文館，2001年
- A. H. マズロー著、小口忠彦訳『〔改訂新版〕人間性の心理学——モチベーションとパーソナリティ——』産業能率大学出版部，1987年（Maslow, Abraham H. (1970), *Motivation and Personality*, second edition, Harper & Row)
- コリン・ウィルソン著、由良君美・四方田剛己訳『至高体験——自己実現のための心理学——』河出書房新社，1979年（Wilson, Colin (1972), *New Pathways in Psychology: Maslow & the Post-Freudian Revolution*, Victor Gollancz Ltd., London)
- コリン・ウィルソン著、中村保男訳『アウトサイダー』集英社，1988年（Wilson, Colin (1956), *The Outsider*, Victor Gollancz Ltd., London)
- G. W. オルポート著、今田恵監訳、星野命・入谷敏男・今田寛訳『人格心理学』（上）（下）、誠信書房，1968年（Allport, Gordon W. (1961), *Pattern and Growth in Personality*, Holt, Rinehart and Wilson)
- デニス・マクウェール著、山中正剛監訳、武市英雄・松木修二郎・山田寶・山中速人訳『コミュニケーションの社会学——その理論と今日の状況——』川島書店，1979年（McQuail, Denis (1975), *Communication*, Longman Group Limited)
- T. H. リーヒー著、宇津木保訳『心理学史』誠信書房，1986年（Leahey, Thomas Hardy 1981, *A history of Psychology: main currents in psychological thought*）
- H. C. ワレン著、谷田部達郎訳『心理学史』創元社，1951年（Warren, Howard C. (1920), *A History of the Association Psychology*, Charles Scribner's Sons)
- M. ウェーバー著、清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波書店，1972年（Weber, Max (1922), *Soziologische Grundbegriffe*, in *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen, J. C. B. Mohr)
- S. フロイト著、古澤平作訳『続精神分析入門』日本教文社，1953年（Freud, Sigmund (1932), *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*, Internationaler Psychoanalytischer Verlag)

（2002年10月11日経済学会受理）